

# 更級日記指導の実践と反省

——心情語に着目してのとり扱い——

伊 東 武 雄

## 一 実践の立場

平安朝の女流日記文学指導の一つの方法として、心情語に着目することが考えられる。日記文学である以上、しかも、対象が特に平安朝の女流日記であるときは、まず、作者の心情を理解し、ものを感じ方、考え方を読みとること、そしてその性格と人がらを考えさせることが必要であろう。その最初の手がかりとして、心情語を吟味分析することは意義のあることと思われる。

それでは、心情語に着目して、作者の人間像を理解させ、作品の理解を深めさせるにはどうしたらよいか。そのための心情語指導の方法を、わたくしは、藤原与一先生の読解の三段階法、素材読みに求めている。(註一) すなわち、まず、時、場所、登場人物、事件を示すことば(—これらを外的素材と呼びたい—)を吟味し、心情語の用いられる外的条件を明らかにする。次に、心情語を中心に、状態語、動作語(—これらを内的素材と呼びたい—)を分析して、作者の心情、心境、性格、生への姿勢を理解させる。以上のような方法をとっている。

心情語指導の留意点としては、次の四つのことに気をつけている。(一)、文脈の流れの上で、正しくとらえられねばならない。まず、ダレの、ドンナトキの、ドコデの、ドンナ事件の心情語であるかを理解させることである。次に、その心情の生じた原因と心情のかけり、その心情によってひきおこされる動作を分析吟味することである。この両面から心情語をせめたとき、その性格は明らかにされうると言えよう。

(二)、心情語そのもののもつ意味について、正しく深い理解をもっていなければならない。古文における心情語も、とかく口語への言いかえにおわりがちである。この弊害を避けるためには、まず、心情語の古語としての意味をはっきりとつかませる必要がある。古典重要語として考えられる心情語の理解はもちろん、次のような心情語は特に意味を明確にしておきたい。

a、「はづかし」「はかなし」「はしたなし」などのように、現代語と意味のことなる心情語(古今異義語としての心情語)。

b、「おぼつかなし」「うしろめたし」「心めたし」や「くちをし」「くやし」「あたらし」「ほりなし」や「わびし」「さびし」などのように類似した意味をもつ心情語(類義語としての心情語)

C、「あやし」「いみじ」「かなし」などさまざまな意味をもつ心  
情語。(多義語としての心情語)

d「心うし」と「ものうし」、「つらし」と「つれなし」など混  
用しやすい心情語(類音異義語としての心情語)。

e「心苦し」と「心安し」「すさまじ」と「めでたし」など対に  
なる心情語(対義語としての心情語)。(註三)

(四) 心情語が単なる口語訳におわらず、作者の心情を深く、的確  
につかむためには、対象となる心情語の性格が正しく把握されてい  
なければならぬ。例えば、「あはれ」については、沈潜性、悲哀  
性、心の深さという性格、「をかし」については、解放性、明朗  
性、心の広さという性格を理解させて、作者の心情を深く読みとら  
せることが必要である。このためには、斎藤清衛先生の精神史的立  
場、和辻哲郎博士・九鬼周造博士などの美学的哲学的立場、岡崎義  
恵博士の文芸学的な立場、島津久基博士、大野晋氏などの語史的  
な立場など、各方面の立場をできるだけ導入して、心情語を追求し  
ていくことが必要となろう。(註三)

(四) 状態語、動作語の分析によって、動作・状態の奥にある主体  
の心情を読みとり、その援用によって、心情語の理解が深められね  
ばならない。例えば「つれづれ」の孤独性、無為性の中にある喪失感  
とアンニュイ(倦怠)の気持ち、「ながむ」という王朝的なもの思い  
の姿勢の奥にある悲嘆・苦悩の心情、「待つ」という一夫多妻制での  
王朝女性の不安と苦惱——このような状態語、動作語の分析と関連  
させながら、心情語の追求をきびしくしていくことである。(註四)

(四) 作品理解の手がかりとなる心情語をほりさげ、作者の人間性  
と生への姿勢を理解させることも考えられなければならない。例え  
ば、土佐日記の「悲し」から貫之の女兒への深い親心を、蜻蛉日記

の「はかなし」から道綱母の生への不安を、紫式部日記の「憂し」  
から紫式部の深い自己凝視と厭世的な人生観を、更級日記の「ゆか  
し」から孝標女の一途なあこがれの姿勢を考えさせることも意味の  
あることであろう。(註五)

以上のような立場に立つて、貧しい実践を試みたものが、次の更  
級日記指導の実践である。授業記録を手がかりにその実態を報告し、  
二・三の反省をつけ加えたい。

## 二 実践の実態

指導の対象、期間、時間、使用テキストは次のようになってい  
る。  
指導対象 二年普通科三クラス、一クラス56名

(男子35名、女子21名)

指導期間 41年4月～5月

指導時間 9時間(10時間)

使用テキスト 角川書店 高等古典乙1 古文2  
学校 古典乙1

指導の概要(教材と時間配当)は次のようになってい  
る。

△導入▽ 更級日記と王朝日記文学の流れ 時間配当

1、あづま路の果て 物語へのあこがれ

2、門 出 出立の悲しみ

3、駿河の旅 新鮮な旅情

4、三条の宮の西なる住まひ 物語を求めめる心

5、梅の契り 継母への慕情

6、をばのたまもの 源氏物語を読む喜び

△整理▽ 暗語と感想(感想文提出)

助動詞・助詞の整理——プリント

△補追▽ 竹芝伝説・をばすての宿・ひまなき涙・よもぎが露

——プリント

教材の具体的な実践は次のように整理することができる。

(1) あづま路の果て —— 心情語に着眼してのとり扱い

一、留意点

心情語 (あやし・ゆかしさ・心もとなし) に着目し、その分析・吟味によって孝標女の物語への一途なあこがれを読みとらせる。

二、指導事項

① 時・場所・登場人物を指摘せよ。

② 心情語を三つぬき出し、どのような気持か考えよ。

③ この部分の大きな事件を二つ列挙し、その中心素材を記せ。

三、作品分析

1 場 所

あづま路の道の果てよりもなほ奥つ方  
常陸の国 (茨城県)  
? おひいづ

上総の国 (千葉県南部)  
父孝標の任国

2 時

とおまらみつ  
十三なる年 (寛仁二年一〇二〇) 九月三日

3 登場人物

作者 (上総国に) おひ出でたる人 —— 自伝的物語性  
客観視

姉 (あやしの猫、萩の葉)  
姉の出産と死、17歳

ママ母 (25梅の契り)  
その他

物語の話をする

「つれづれ」 (いなかでの生活の単調さ)

「あやし」 (回想の感情) 執筆時の心情  
少女時代のいなかくささ (鬱き)

4 事 件

① 物 語 (その物語・かの物語・)  
光源氏のあるやう

いかで見ばや

「ゆかしさ」

(憧憬)

(文学と宗教) —— この作品をつらぬく中心素材

② 薬師仏 (等身)

手洗ひなどして 祈り申す  
身を捨てぬかをつき

「心もとなし」 (不安)  
(焦燥)

5 主 題

物語へのゆかしさ —— その一途さ、烈しさ

#### 四、授業過程

1、更級日記について解説する。

ア、成立（王朝日記文学の流れのあらましを説明し、黒板に図示する。）

イ、内容（少女期のおこがれ、中年期の苦惱、晩年の寂寥について話す。）

ウ、作者（作者の人がらと作品の意味について説明する。）

2、「あづま路の果て」を学習する。

ア、音読させる。

イ、口語訳する。

ウ、時・場所・人物・事件・心情について質問しながら、黒板に内容の整理をする。

エ、注意すべき語法・表現について、黒板に整理する。（参照「授業記録の実例その1」八七ページ）

#### 五、生徒の記録（授業記録）

ア、興味深くおもしろかった。理由、途中に先生の学生時代の話——食費をさいて一途に古本を買おうとしたこと——があったから。これからも授業にもとづいて、こういう話があればと期待します。

イ 菅原孝標女の人生への考えの移り変わりに、生きていくことの意味について考えさせられた。

ウ 菅原孝標の女の中年期のことをもっとくわしく知りたいと思

(2)

門 出 1 心情語に着眼してのとり扱い 2 1

#### 一 留意点

三つの場所での心情語（悲し、あはれに悲し、恐ろし）の分析によって、その心情を知り、やさしく可憐な作者の性格を理解させる。

#### 二 指導過程

① いくつの場所が出てくるか、どんな場所か。

② 天候、景色の描写と、それへの感想を示すことばをさがし出せ。

③ それぞれの場所での心情語をさがし、分析せよ。

④ 作者の人がらを記せ。

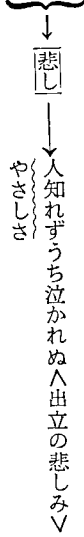
⑤ 心情語の含まれている心情描写の文と光景描写の文との表現上のちがいを述べよ。

三 作品分析

1 年ごろ遊び慣れつる所（上総国）  
あらはにこぼす

日の入りぎわ 〆荒涼〰  
すこく霧りわたる

薬師仏の立ちたまへる



2 門出したる所（いまたち）

（海）

いとおもしろし

〆はるか〰

可憐さ  
感傷的

（野）

〆風景のよさへの感嘆〰  
旅での喜び

かりそめの萱屋（めぐり、葎なし）  
（蕨・葎ひく）

北↑ （海） 〆光景の美しさ〰

夕霧立ちわたる  
いみじうをかしけれ

あはれに悲し

〆出立の悲しみ〰

3 下総の国いかた（九月十五日）  
とちまひつつか

雨降り―庵なども浮きぬばかり

恐ろし

↓  
寝  
少女らしさ  
いも寝られず

〆旅での不安〰

四、授業過程

1 音読させる。

2 口語訳をさせる。

3 指導過程①～⑤の質問をし、板書として整理する。（作品の分析）

4 ことばの整理（①「る」―自発・可能、②同格の「の」。③

「じ」と「ぬ」

五、生徒の記録（授業記録）

ア 他の授業に比して楽しく授業が受けられる。

イ 大体の人はまじめに授業を受けていてよかったと思う。

ウ 授業について、今までのままでいいと思う。なるべくなら延長してほしくありません。（参照。「授業記録の実例その

2」八八ページ）

(3) 駿河の旅

——心情語のない場合のとり扱い——

一 留意点

センテンスの短かさ、簡潔さに着目して、作者の生き生きとした新鮮な旅の驚きをよみとらせる。

二 指導事項

① 地名を検討せよ。

② 作者の心に強く印象づけられたものは何か。

③ それはなぜか。

④ 表現の特色について感じとられることは何か。  
⑤ そこから作者のどのような気持が読みとられるか。

三 作品分析

1 場所

駿河（静岡県） 此れより駿河なり——喜び、期待

2 素材

a 岩 壺  
よこはしりの関のかたはら

石の穴から出る水の清さ、冷たさ——驚き  
えもいはず大きな

b 富士 富士の山はこの国なり

わがおひいでし国にては西面に見えし山なり

情景描写の美しさ

○さまことなる山のすがた  
○甜青—白雪（山の色）  
○煙・火（特色）

たとえのうまさ  
色彩感

山の頂夕暮  
平らぎたるより

山のまま、いと世に見えまなり

驚き・賛美

3 表現 a 「なり」の多用

（リズム感）

心のときめき

4 心情 生き生きとした新鮮な旅情・旅での驚き

——生き生きとした驚き

四、授業過程

- 1 質問事項（「指導事項①」「⑤」）を板書する。
- 2 黙読させ、問題を考えさせる。

- 3 質問に答えさせながら、内容のまとめを板書する。
- 五、生徒の記録（授業記録）——省略。

(4) 三条の宮の西なる住まひ — 心情語の少ない場合のとり扱い —

一 留意点

事件に対する作者の心情を理解させ、それに適切な心情語（心もとなし、ゆかし、くちをし）を考えさせる。

二 指導事項

① 場所はどこか、どんなところか。

② どのような人物が登場し、どんなはたらきをするか。

③ いくつのどのような事件がべられているか。

④ 主語をおぎなつて正しく口語訳せよ。  
⑤ 作者の気持を読みとり、それに適切な心情語を考えよ。

三 作品分析

1 場所 三条の宮の西なる所 || 都のうちとも見えぬところのさまなり

(広々と荒れたる所  
大きに恐れなる深山木ども (ノ生エテイル所)

2 登場人物

母 — 物語をさがす (衛門の命婦をさがして文をやる)  
衛門の命婦 — 草子をくれる (珍しがりて喜びて……)  
親族なる人 わざとめでたき

作者

3 事件

(1) 都に到着 (寛仁四年一〇二〇・十二月二日) — 期待はずれ、失望 —

(2) 母を責める

「物語求めて見せよ」

(3) 命婦より草子をもちょう

(心もとなし)

(うれし)

— あせり  
① 夜昼これを見る  
— よろこびうれしくいみじくて

② またも見まほしき (ゆかし)

③ たれかは物語求めて見する人あらむ

4 気持

嘆き

(くちをし)  
(かなし)

#### 四、授業過程

1、音読させる。

2、文中のことばについて説明をする。

3、内容について話しあひをする。

ア 登場人物の役割わりについて。

イ 作者の行動と事件について。

ウ 作者の心理について。

4、内容の整理を板書を利用して行なう。

5、ことばの整理を板書を利用して行なう。

a 同格の「の」

b 願望表現

c 反語表現

(見まほしき)

(たれかは)

(5) 梅の契り

——動作語の吟味を援用してのとり扱ひ——

#### 一 留意点

「待ちわたる」「思ひわぶ」という動作に着眼してその奥にある心情(心もとなし、わびし)を読みとり、人なつこく純情可憐な作者の性格を理解させる。

#### 二 指導事項

① どんな事件があったか、二つあげよ。

② それに対する作者の心情語と動作語をぬき出せ。

③ 作者の気持を考えよ。

④ 作者の人がらを考えよ。

⑤ この物語をみやびなものにしているものは何か。

#### 三 作品分析

##### ① 事件

1 まま母の家出

宮仕へせし

(風流心)

思ひしにあらぬこと

世の中恨めしげ

△その年もかへりぬ▽

##### ② 心情・動作

—恋しくあはれなり(恋し)

しのびねをのみ泣きて

##### ③ 気持

④ 作者の人がら

—人なつこさ

—純情さ

##### ⑤ 中心素材

(梅) —王朝的なみやび

「これが花が咲かむをりは来むよ」



2 歌の贈答

いつしか梅咲かなむ

待ちわたる(心もとなし)——素直さ

花もみな咲きぬれど音もせず

思ひわびて(わびし)

——可憐さ

頼めしを……………(作者の恨みごと)  
なほ頼め……………(まま母のなぐさめ)

四、授業過程

1 音読させる。

2 二段にわけさせる。

3 解釈させる。

4 内容の討議をさせる。

(指導事項①)⑤)

5 ことばの整理を板書を利用して行なう。

① わたる(a他へわたる。 b待ちわたる。 c霧わたる。)

② 頼む(a頼めしに。 bなほ頼め)

③ なむ(a心の程なむ。 b梅咲かなむ)

c 立ちなむ。 d長くなりなむ)

④ 世の中(男女の世界、夫婦の間がら)

(6) をばのたままの

——心情語に着目してのとり扱い 3——

一 留意点

心情語「心もとなくゆかし」「くちをし」「うれしさぞいみじきや」を吟味分析して、源氏物語を読む喜びを理解させ、その読み方の烈しさから、作者の一端な浪漫的性格を理解させる。

五、授業記録

ア 先生がいつも笑顔で接するので、こちらもつい緊張した気分がとけてしまう。

イ 菅原孝標の女がまま母の来るのを待っている気持がとても切実に歌に歌われています。

ウ 平安時代の女の人は男が来るのをじっと待っていないかならないという。今のわたくしは、その頃の社会が納得いかない。

## 二 指導事項

- ① 登場人物に留意して三段に分けよ。
- ② 各段に出てくる書名を記せ。
- ③ それらによってひきおこされる作者の心情を吟味せよ。
- ④ 作者の心情からひきおこされる動作をのべよ。
- ⑤ 作者の人がらを記せ。

## 三 作品分析

### ① 登場人物

1 母——心もなぐさめむと心苦しがる

### ② 書物

「紫のゆかり」  
源氏物語若紫の巻

### ③ 心情

物語を求めて見せる——慰みゆく  
つゞきの見まほし  
心もとなくゆかし  
見得ず——思ひ嘆かる  
いとくちをし

### ④ 動作

(あせり)  
心のうち祈る  
「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」  
仏に祈る(太秦広隆寺)  
(喜び)  
うれしさぞいみじきや  
「後の位もなにかはせむ」——途さ、烈しさ、純粹さ  
「源氏物語を讀む」  
「おはしるはしるわづかに見つつ」  
「人もまじらず几帳のうちにうち臥して引き出でつつ見る」  
「昼は日ぐらし、  
夜は目のさめたるかぎり火を近くともして見る」

### 2 をはなる人——あはれがり、珍しがりて

物語をくれる

「源氏」の五十余巻  
「ざい中将」(伊勢物語)  
「せりかは」(しちら)「あさうづ」  
(散逸した物語)

ゆかしくしたまふなるもの

それにおぼえ浮かぶ  
いみじきこと(自替)  
物語のことだけを心に  
かける。——浪漫性、空想性

清げなる僧——法華經とく習へ  
習はむとも思ひかけず  
① われはこの頃わろきぞかし かつちもよく髪もながくなりなむ  
② 夕顔、浮舟のやうにこそあらめ

信仰をすゝめる  
「法華經」五の巻  
女人往生を説く

いととはかなくあさまし——老年の感慨・後悔

## 四 授業過程

### 1 音読させる。

### 2 通釈させる。

3 内容(指導事項①～⑤)について話しあう。結果は黒板に整理する。

4、作者の性格、人がらについて整理する。

5、ことばの整理を板書によって行なう。

a 心情語——「心もとなし」「ゆかし」

b 容姿語——「うつくし」「うるはし」「清げなり」

c 対立語——「よし」↕「あし」、「よろし」↕「わろし」

d 考えたい古語——「夢」「髪」

五、生徒の記録(授業記録)——省略。  
生徒の記録(授業記録)とは次のようなものである。

科目名 古文 更級日記 菅原孝標の女 (2時間目) 4月20日水曜 (晴) 校時、記録者 山本恵子  
 作者名

〔板書〕  
 あづま路の果て―物語への一途なあこがれ  
 一、内容の整理

時 九月三日

場所 上総の国

登場人物 作者、姉、まま母

筆者の気持

○あやしかり 賤―少女時代の

△あやし▽ いなかくささ

○ゆかしき あこがれ―物語への

△ゆかし▽ あせり―物語が読めない

○心もとなき

△心もとなき▽

薬師仏、祈り

二、ことばの整理

① いかで

(a)いかで見ばや ナントカシテ(願望)

(b)いかでか語らむ ドウシテ(反語)

② 反語表現

③ 助動詞、助詞

1 あやしかりけむ

2 あんなる

3 見ばや

4 思ひつゝ

5 あるかぎり

6 奥つ方 「の」格助詞

〔授業順序(内容)〕

あづま路の果て

一、読み

二、黒板に書かれ

た質問の答弁

門出

一 読み

二 前半口語訳

〔授業についての印象とその理由〕

全体的になごやかな雰囲気です授業が楽しい。

〔印象に残ったこと、考えさせられたこと〕

昔は上流階級でさえ貧しかったことを知って、下層階級の

生活を想像して現代に生まれてよかったと思った。

〔わからなかったこと、問題に思ったこと、聞きたいこと〕

この時代の階級制度と政治組織が知りたい。

〔授業態度とその反省〕

一部の人だけでなく全員が予習してくるようになったら、

授業がすみやかに進行すると思う。

〔授業についての助言・注文〕

黒板に書くとき、あとからつけくわえることがありそうな

時は、その間を空けて開を空けて書いていただけると、ノ

トの整理に非常に助かります。

名  
科  
教  
者

更 級 日 記 菅 原 孝 標 の 女

(2時間目)

4月9日土曜

(晴) 雨

2校時・記録者 植木 実

〔板書〕

門 出

一 出発の悲しさー

内容の整理

1 年ごろ遊びなれつる所 (場所) (光景) (作者の気持、性格)

上総 国府

①日の入りきは あはれに悲し

霧 すごい 打ち泣かれぬ

②あらはなる家 (やさしさ) (感傷的)

薬師仏 旅へ出発

2 門出したる所

へいまたちV

葦屋

海 野 悲し

北↑ 海 おもしろし 美しさ、光景

夕霧 をかし の趣深さ

3 いかた(下総国) 恐ろしいも 旅での

雨 寝られず 不安

二 ことばの整理ー注意すべき語法

①る うち泣かれるー自発

見やらるー可能

②同格の「の」(デアッテ)

③「つ」と「ぬ」

つ……意志

ぬ……自然的

〔授業順序(内容)〕

最初出席をとる

「あづま路の果て」の

読みと着眼点の注意

「門出」の読みと

先生の説明・質問、黒板

へ整理

「駿河の旅」の読み

と注意

「三条の宮の西なる住

まひ」の読みと注意

〔授業についての印象とその理由〕

先生の授業は、ていねいでポイントをはっきり言ってく  
るので勉強しやすい。

〔印象に残ったこと・考えさせられたこと〕

朗読した人たちがみんなよく読んだと思う。

〔わからなかったこと、問題に思ったこと、聞きたいこと〕

わからなかったことは先生が丁寧に教えてくれたのでだ  
いたいわかった。

〔授業態度とその反省〕

一年の時は、古文の時間目がさえていなかったもので、二年  
では真剣に先生の授業を受けた。

〔授業についての助言・注文〕

先生の進み方は少し速いのでこちらの予習も思うようにい  
かない。

この記録は三クラス中、二クラスで実践した。出席簿の順に一名ずつ、毎時間できるだけ克明に記録させるようにした。裏面には、授業中に思ったり、考えたりしたことだけでなく、生活や、社会について思っていること、自己の人生観や読書感など、現在思うことを原稿用紙のわりに、自由に書かせるようにした。(ま)

### 三、作品理解の実態

以上の指導・学習から生徒たちは、更級日記について、また、孝標女の生き方、人がらや生き方をどのように受けとり、どのようなことを考えたかを生徒の感想文に基づいて考察したい。

感想は「更級日記を学んで」と題して、西洋紙 $\frac{1}{2}$ に自由に書かせて提出させた。集まった感想文は一二五編、それを検討してみると次のようになっていた。

#### Ⅰ 作者の生き方と人がら

まず、作者の源氏物語へのあこがれの一途さに驚いている。

○ あの当時の女性はもっと弱々しく、女らしく、そして又優美なものと思っていたが、彼女のように本を読むことを一途に思うような女性もある事を知った。(感想例1 男)

○ 私が一番感じた事は主人公の読書熱心のものすごさです。私はあまり読書は好きではありませんが、こんなにまでも読書を好む人がいるなんて思いませんでした。

我々、現代の女性は作者のなんとかして源氏物語を読みたいと思うような一途な気持ちは少ないと思います。(感想例2 女)

この驚きは、現代社会、特にやることの多い高校生活への批判となり、一つのこと心ゆくまでぶち込むことのできた昔へのうらや

ましざとなつてゐる。

○ 作者の本に対する執着ぶりに驚きを感じると共に、昔の人は今の私たちと比べて何と余裕のある趣きのある生活を送っていたことだろう。何ともうらやましいかぎりである。(感想例3 男)

作者の生き方についても、うらやましい、すばらしいと感心、感動、共感し、尊敬をさえ感じている。

○ 私はこの更級日記を読んでこんなにも一つのことのうちこんで一つのことを一途に思う作者の態度に感心しました。私自身一つのことのうちこむことができないので、この一途な心にひかれました。人間が一つのことのうちこんでいるときが一番美しいと思います。また作者の自然への表現がいかに女らしいと思えました。(感想例4 女)

作者の人がらについては、多くの生徒がその情熱さ、一途さ、人なづかさ、感傷性、清らかさをとりあげ、うらやましいとし、すきだ、愛すべきだと好意、好感を示し、その人がらに感動し、こんな女性になりたいとあこがれる反面、かわいそうだと同情を示している者もある。

○ この更級日記の作者、孝標の女は宝石のような感受性を持った人であると思った。それに、実に愛すべき人である。涙ぐましいほどの物語への一途な憧れ、まま母へのおまい等、物語の一編一編にあふれる彼女の心は実に可憐である。私はほんの一部を学んだだけだから後半がどんなものであるか知らないが、私の読んだ限りにおいては、彼女は幸福な人であったと思う。現代のこの世の中であれほど一途な願いを持つことができるであろうか。そして、彼女が源氏物語一そろいを手に入れた時の喜びにまざる喜

びを味わうことができるであろうか。あれほど激しく願っていたからこそ、「後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり……」などという気持ち味わえるのである。また「おとなになれば顔かたちもさぞ美しくなって髪も伸びることだろう」とか、「夕顔、浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心」とか、いかにも少女らしい空想でゐる。彼女こそ、ほんとうの女性らしい女性、……無理しないでも女性らしい人だという感じがする。(感想例5 女)

だが、反面、作者を褒め者だとし、また、母に苦勞ばかりかけて、わがまゝであり、利己主義者だときめつけ、作者への反撥と批判を示しているものもないではない。そして作者は幼稚で、その気持ちが充分に理解できず、愛情がもてない。従って、作品も退屈で、感動するところはなかったと作品への反撥を示しているものもないわけではない。

○ 作者は、物語が大変好きな文学少女であった。だから源氏物語を手に入れた時の喜びは大変なものであった。源氏物語を読む心地を『後の位も何にかはせむ』と言っている。このころの後の位というものは女性にとつて最高のものだったにちがいない。それよりもまさるといふのだから大変うれしかったのだらう。しかし、ぼくにはその気持ちがびんとこない。更級日記には、よく物語のことが出てくるのだが、それほどまでに物語に熱中できるものだらうか。ぼくには少し誇張されているようにも思えない。全体としての感じは、古文がよくわからないためか思えないが、退屈であまりおもしろくなかった。(感想例6 男)

## I 作品への共感、感銘

感想例6のようなものもないわけではないが、その数は大変少ない。多くの生徒は、作者の気持ちはわかるとし、作品に共感し、その感銘を記している。その理由として

- ⑦ 作者の素直さ、やさしさ、女らしさ。
- ⑧ 文章のわかりやすさ、親しみやすさ、文体の簡潔さ。
- ⑨ 心理描写の細かさ、情景描写の美しさ、性格描写のよさ。などが挙げられている。

○ 更級日記を読み終つてみて一番に感じたことは、何かすつきりとした気持となり、何の抵抗もなく、素直な感動を受けたのだが、これまでの物語に比較していや味というものが全く感じられなかった。それは文章のみやすさからくるものと考えられるが、やはり女性の切ない一途な心が僕にこんな感じをいだかせるにいたらしめた。ほんとうに、この文章は全体として実にやわらかい。そして、女性らしさが満ち満ちて、この女性に対して、一種のあこがれさへも感じ出してくる。現代の女性との距離を自然に考えてくる。

実を言うと、この感想文を書くまでは、いろいろと批判して書くつもりでいたが、どうも出てこない。それだけこの物語はよく書けているということであらう。(感想例7 男)

○ 私は古文はめんどくさいのであまり好きではなかったのですが、この更級日記には、最初目を通した時から妙にひきつけられて興味を持ちました。

それはこの物語が、十代の少女の心の動き、つまり人や物に対するあこがれを純粹に素直に、そして生き生きと描き出しているからだと思います。

それから、何にしても物語に一生懸命になれるということは素晴らしいと思います。まだ私達十代は一番それが出来る時だと思いますから大切に過したいと思います。

私は、更級日記によって古文が好きになれそうな気がします。

### (感想例 8 女)

### Ⅲ 印象に残ったところ

印象に残ったところとその理由を多い順にならべると次のようになっている。

- ① 駿河の旅——文章の簡潔さ、情景描写のうまさ、滑らかさ。
- ② 梅の契り——作者の心のやさしさ、作者の悲しみ、歌の趣深か。

③ をばのたまもの——作者の喜び。作者の願い。

④ 門出——情景描写、心理描写のうまさ。

⑤ あづま路のはて——途な願い。

代表的な感想をいくつか挙げておきたい。

○ 六つの作品の中では、私は「駿河の旅」が一番好きだ。だから、暗唱もこれを覚えた。なぜ好きかということとなく滑らかな感じがするから。例えば、石の中から水が出てくるところなどとても気持がよい。また、情景描写が美しく比喩がうまいところなど気に入った。富士の美しさが目に見えるようだ。色、煙、火などであざやかに描き出している。何度読んでも気持のいい文で新鮮な旅の翳きがよく表われている。文末で「なり」をくりかえしてリズム感に富んでいるのもよい。(感想例 9 女)

○ この中で一番印象に残ったのは「梅の契り」である。この作者のやさしさ、純粹さ、かれんさ、その中に何か強いものがある。

る。こんな子をもったまま母はたとえ別れていたとしても、いつも自分のことを思っている人がいると思うと自然に勇気がわき、心のささえとなったろうと思う。(感想例 10 男)

○ この日記をよく読んでみると、何百年も前に書かれたとは思われないほど、生き生きとした文章で書かれてある。特に「をばのたまもの」の所は、うれしさが手にとるようにわかる。(感想例 11 女)

次にやゝまとまった作品感想を二つ挙げておく。

○ 古典の中にもこんななわりとすぐ理解し易いのがあったのかと思う位親しみを感じた。だから覚えるのにもそんなには困らなかった。

作者の性格・物の考え方等々、私達現代の者にとってもうなづける点がたくさんあった。特にママ母との事。そして夕顔浮舟のように美しくなりたいと思うところは、いかにも少女らしいと思った。可愛らしいと思った。作者の文学(「源氏物語」)へのあこがれの熱ばさには少々驚いた。

「駿河の旅」の描写の簡潔な点が良かった。何と言っても、やはり「梅の契り」に最も感動した。少女の感傷と思われるかも知れないが、しかし、ママ母に対する作者の暖かい思いやりのある、そして少女らしい心づかいにうたれた。それと同時に、ふつうなら、ママ母にあんなには優しくできないのに、作者はどうしてあんなにできたのだろうかと思議だった。それは社会環境(當時の一夫多妻制)やママ母の人間の立派さがあつたからであろうか。

日記の書き方の良い手本を示してくれたと思う。作者のように

「可愛らしい女性」になりたいと思った。(具体例12 女)

○ 源氏物語を読みたいという少女の願いとそれがかなえられた時の非常な喜びが描かれている。年頃になれば美しくなるだろうと思ひ、物語中の人物に憧れるところなどはいかにも夢多き世間知らずな少女らしい気持を表わしている。

全般を通じて、作者は物語に対する熱狂的態度をとるロマンチックな感情とまじり気のない純粹な気持を持つ文学少女であると思う。薬師仏を作って祈るなど少女らしい感傷的な性格が感じられ、少女のやさしい心根がしのばれ感じやすい少女の心の美しさが印象に残る。

また、「梅の契り」ではまま母を恋い慕うやさしい心持がよく表わされ、作者の温順で思いやりの深い人がらと純情さが感じられる。続いて、ひたむきで可憐な少女の人がらが印象に残る。「をばのたまもの」では素直な喜びが表わされていて、とても可愛らしい。

この『更級日記』は作者の学問的才能や文学的才能を、さらに人一倍鋭い感受性を敏感に文面に反映した、純情可憐な愛を憧れつづけた一女性の生涯の魂の記録であると考ええる。(具体例13 男)

#### IV 疑問点、その他

疑問点としては、時代と社会に関係のあるものがあげられている。すなわち当時の信仰と夢をどう考えるか、当時の女性の環境、社会機構、家族関係はどうなっていたかなど言うものである。こうした時代的なものの考え方と時代背景の中で更級日記もとり扱われる必要があるわけである。

最後に、その他として、次の感想文を掲げておきたい。

○ 私は玉島高校でこの更級日記を習っていた。「あづま路の果て」「丈六の仏」「子忍の森」だった。その時の古典の先生が、作家の堀辰雄がこの更級日記を読んだの感想を書いているのがあると聞いて読んでくださった。その中にこういう文章があった。「ついある日そのかすかなかれたようなにおいの中からとつぜん一人の古い日本の女の姿があざやかな心像として浮んできた。それは私にとって大切な一瞬であった。」それを聞いたのは今でも覚えてる。

私はこれからこの更級日記を全部読んでみたいと思う。(感想例14 女)

#### 四、実践の反省

まず、心情語を中心にすえた指導のあり方について、反省してみたい。

(一) 文脈の中での心情語のとらえ方はこのようなことではよいのかということである。心情語に着目しての作品分析のしかたにあらさとあまさがありはしないか、という不安がある。これをのりこえるには、後記注五の参考文献に示したような心情語分析のための、さまざまな立場を検討、導入して方法的な勉強をしなくてはならないことになる。特に、文体論的立場の導入がなされなくてはならない。とともに、読解の三段階法の面から言うと、素材読みの段階にとゞまっているわたくしの方法を文法読み、表現読みへと深めていく努力もなされなくてはならない。

(二) 心情語による作者へのせまり方も不徹底ではなかったかということである。「更級日記総索引」(塚本鉄雄、武蔵野書院)によ



つて、更級日記の心情語を調査整理して図示するなりして、心情語の世界をつかんだ上で、心情語による作者の精神構造の解明もあってよかつたのではないかと思われる。とともに、心情語年表の作成も必要であつた。朝日新聞社、日本古典全書「更級日記」

(玉井幸助)の解説にあるぐらゐの略年譜に心情語を添えて、作者の苦悩の生涯を心情語によつてたどつて考察することもあつてよかつたと思われる。心情語によつて、年令的に心情の推移をおさえれば、一つの女の一生を理解することも可能であらう。時代の重みの中で心情語をとらえるということである。

三、心情語の奥にある時代背景、時代的なものの考え方を追究し、その中で心情語をたしかにとらえることも必要であらう。これには、生徒の感想・疑問点に示されている通りである。そのためには、わたくし自身が、当時の社会制度、社会構造、女性環境の知識を得ること、当時の夢に対する人々の態度、信仰の問題などを学習しなくてはならないことになる。

以上のことから、本格的な作品分析の必要と自己の非力、一日一日の教材研究にのみおわれているニコヨン授業、ニコヨン教師からの脱出の必要が痛感される。

次に、授業のしかたそのものにも反省すべきことが多い。

ア、問題解決法の採用。実践の実態の指導事項に示したような問題をプリントし、その問題を解決させることによって、表現をみつめ、考える力を育てるべきであつた。

イ、ノート法の指導。単語帳を作成させ、重要古語をもつと正確に深く把握させるべきであつた。

ウ、暗誦法の徹底。すきな部分をもつと徹底させて、文章のリズ

ムを体得させるべきであつた。

エ、すぐれた感想の紹介。生徒の感想例14にあるように、堀辰雄のものはやはり紹介してやるべきであつたし、生徒の感想もこれはというものを紹介して、生徒の鑑賞を深めるべきであつた。

オ、アンケートの実施。感想文によるだけの作品評価ではなく、アンケートをとつて、その共鳴度、理解度、関心度、鑑賞の深さなどを精確に知るべきであつた。

注一、○ 藤原与一先生「国語教育の技術と精神」、(新光閣書店 昭40・7)

○ 藤原与一先生「毎日の国語教育」、(福村書店、昭30・4)

二、手近かなものでは、今泉忠義監修「古文単語の整理法」(学習研究社、昭37・3)が参考になる。

三、次のような文献が参考にならう。

○ 斎藤清衛先生「中世日本文学」、(文学社、昭10・12 ↓ 有朋堂、昭41・5)

○ 和辻哲郎博士「日本精神史研究」、(岩波書店大15・10) ↓ 「ものあはれについて」など。

○ 九鬼周造博士「文芸論」、(岩波書店昭16・9) ↓ 「情緒の采譜」など。

○ 岡崎義恵博士 // 美の伝統、(弘文堂書房、昭15・9)

// 日本文学、(岩波書店、昭10・12)

// 日本文学の様式、(岩波書店、昭14・9)

- 島津久基博士 // 国文学の新考察 (至文堂、昭16・9)  
— 「つれづれの意味」など。
- 大野晋氏 // 日本語の年輪 (有紀書房昭36・9)
- 清水文雄先生 // 「つれづれ」の源流 (「国語教育研究」六号、七号、昭37・12・昭38・5)
- 四、「あはれ」「をかし」「つれづれ」「ながむ」「待つ」の分析は清水文雄先生 // 源氏物語演習ノート (昭28、後期講義、於広大文学部) によった。
- 五、蜻蛉日記の「はかなし」、更紙日記の「ゆかし」については清水文雄先生 // 女流日記 (子文書房、昭・15・7) 文芸文化叢書6) にユニークな考察がある。
- 六、授業記録の体裁については、浜本純逸氏のご教示をいただいた。
- 七、本稿は、四十一年十一月十三日(日)、広島大学文学部で行なわれた、広島大学秋季国語国文学会国語教育協議会で報告したものである。

(広島県立皆実高等学校教諭)